

生きる力を 後押しする。

医療の基本は**栄養**だ

一般病床から
地域包括ケア病床、
医療療養病床を備えた
ケアミックス型の施設として知られる
さくら病院。
何より患者の“生きる力”を後押しする。
なかでも片山寛次院長が訴えるのは、
栄養管理の重要性だ。
福井大学医学部附属病院など
急性期の最前線で培った豊富な経験を生かし、
患者と向き合う。
片山院長が、
その真意を語った。

特定医療法人さくら千寿会
さくら病院 院長

片山寛次



病院のイメージを変える

北陸自動車道を福井インターで降りて国道8号に向かって進む。鯖江方面に車を走らせると、やがて福井県済生会病院、福井赤十字病院などの基幹病院が見えてくる。下河北交差点を右折し、県道229号線に出て最初の信号を右に曲がると「さくら病院」の文字看板が目に入る。

インターからほぼ20分、幹線道路に面し病院からのアクセスもいい。ロケーションの良さが、そのままさくら病院の存在を際立たせていると言えなくもない。

「距離が近いこともあって、日赤（福井赤十字病院）、福井県立病院、福井大学医学部附属病院、福井県済生会病院などからの紹介が多いですね。下り搬送といって、基幹病院の救急外来で治療を受け、入院せずにそのまま直接当院に搬送されるケースもあるんですよ」

さくら病院は、主には急性期の治療を終えその後も継続的に入院療養が必要な患者はじめ、福井市全域の病院、クリニック、介護施設からの紹介患者などを受け持つ。基幹病院で感染症や外傷、骨折などの治療を受け、その後の療養を引き受けたり、栄養管理やリハビリ科を備えている。

患者や家族の話をじっくり聴く

現在71歳。年齢を感じさせない風格ある姿から、大病院や地域医療の現場で積み上げてきた豊富な経験が見え隠れする。医師になって最初に勤務した金沢大学附属病院では、旧第二外科に属し、肝胆膵外科や、後には胃、食道の手術にも参加した。その後、福井大学医学部附属病院に異動して大腸外科を任せられ、途中から肝胆膵外科を担当した。

「日本肝胆膵外科学会の高度技能指導医になりました。当時、福井県下ではまだ数少なかったと記憶しています。その後、膵臓の治療やがん性腹膜炎の治療に取り組み、手術と化学療法、温熱療法、放射線治療も組み合わせた集学的治療を研究、実施してきました。術後の栄養管理を含めて多くの患者さんの状態改善に尽力しました。その経験から、急性期の病院から紹介されてくる患者さんがどんな治療を受け、どういう経過をたどっているかはよく分かれます」

急性期病院は在院日数が短く、緩和ケアや栄養管理まで十分な手が及ばな

ハビリテーションを目的とした転院患者も少なくない。

2022年に院長に就任してから3年余り。片山院長は、地域におけるさくら病院のイメージを変えた人でもある。「それまでは完全に療養型病院。どちらといえば老人病院と見られていた」（片山院長）。そのイメージを払拭し、総合診療を軸に、超急性期以外のすべての医療とケアをワンストップで提供する「コミュニティホスピタル」をめざしてきた。

「私自身もともと外科医で、がん診療や臨床栄養学、緩和医療を専門としてきました。がんはもちろん、心不全、腎臓病、脳血管障害、認知症やその他の慢性疾患から終末期に至るまで、入院治療から在宅医療まで、自分たちができることを最大限に生かし対応できるようにしてきました」

そう振り返るように、栄養治療、緩和ケアはもちろん、慢性疾患の管理、骨折や白内障、痔やヘルニアなどの手術も行い、「患者さんが穏やかに生きることをお手伝い」することに積極的に取り組んできた。ベッド数は63床と小規模だが、診療科の守備範囲は広い。内科、外科、整形外科、リハビリテーション科の他、眼科や消化器内科、消化器外科、肛門外科、呼吸器内科、糖

い。それゆえ片山院長は、紹介されてきた患者や家族にこの先どうしたいのかじっくり耳を傾ける。

「自宅や施設に帰りたいといえば、帰るためにどうするかを考えます。緩和ケアや栄養をしっかりと管理し、リハビリをして、患者さんの生きようとする力を後押しします。たとえばがんの治療の効果は栄養の維持が無ければ改善できませんし、早期からの緩和ケアも治療効果や生存率を改善します。他の疾患でも栄養管理をしっかりと行うことで、状態改善が見込めるケースは少なくありません。要は、急性期から引き継いで、患者さんの意向に寄り添いながら、よりおだやかに社会復帰出来るようお手伝いすることが私たちの役割です」

患者の中には終末期や認知症の人もいる。看取りを依頼されることもある。しかし認知症があっても、患者の意思を尊重しながらどうしたいかを探り、気持ちを引き出し、安心した療養生活のために何が出来るかを考える。意思表示が難しい時は家族と相談して意思決定を支援する。そんなスタイルを貫いてきた。



栄養改善で体は元気になる

さくら病院の強みは、がん診療や臨床栄養学、緩和ケアに基づいて、外来から入院治療、在宅医療までシームレスにカバーできることだ。とくに、福井大学医学部附属病院で33年間の長きにわたって勤務し、消化器外科医として重篤な疾患に携わってきた片山院長は、治療を開始する時点からの栄養管理と緩和ケアの重要性を訴える。

「苦痛の軽減と栄養管理はその後の治療成績を上げる重要な因子です。終末期においても患者さんが希望される場所で療養するには、栄養と緩和の技術が欠かせません。にもかかわらず、栄養治療の是非など、患者さんの意思確認についての申し送りが無い事やそもそもされていないケースに遭遇することがあります。時には、患者さん本人を交えずに、家族に対して『胃瘻は希望しませんよね?』と告げられることもあるようです。一般の人だけでなく、医療者でも胃瘻の適応や効果に対する誤解が多いと思います」

驚きを示しながら片山院長は栄養摂取の重要性を軽視しがちな医療のあり方に警鐘を鳴らす。

「嚥下障害などで経口摂取が十分でなくなると、手足の静脈から栄養輸液

がされますが、高濃度の輸液は血管を痛めますからすぐに血管が使えなくなります。中心静脈栄養を行えば、血管を痛めることなく高カロリーの栄養管理が可能ですが、人の免疫担当細胞の7割は腸管からの栄養素で養われていますので、腸を使った栄養に比べて免疫能が低下します。従って、長期的栄養には、胃瘻や腸瘻による経腸栄養が安全で効果的です。その上で経口摂取を目指して嚥下訓練を行い、胃瘻を除去出来ることが理想です」

片山院長が、栄養の重要性を強調するのは理由がある。福井大学医学部附属病院に勤務していた間、片山院長はNST (Nutrition Support Team: 栄養サポートチーム) を率いていた。NSTは、病気や手術のために十分な食事が摂れない患者に対して最適な栄養補給の方法や、病気の回復などに有用な栄養管理の仕方などを医師や看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士や言語聴覚士などが集まって検討し、提案するチームだ。

当時、消化器外科医としてNSTに加わっていた片山院長は「大病院の入院患者に食事や栄養についてアンケートを取ったところ、栄養状態の悪い患者さんが4割以上いて愕然とした」という。その結果から摂取カロリー

を重視した栄養ではなく、たんぱく質や脂質、ビタミン、ミネラルといった本来、体に必要な栄養価を摂取する重要性に気づき栄養の質を高める食事やメニューに目を向けた。体に正しい栄養が行き届かないと、治療効果も高まらない。たとえ短期の入院であっても、その患者に最適な食事や栄養補給方法を提供することは、退院後の食生活や栄養管理の改善にもつながる。そのことを実感したのだった。

骨惜しみはしない

片山院長に、そうした栄養管理の必要性を説いたのは、金沢大学で研修医1年目に出会った指導医だった。

「竹下先生は、小児外科医でした。食べれない患児の管理は難しく、多くを学べました。また、その頃の金沢大学では、膵臓がんに対して拡大手術を行っていました。膵臓と胃と十二指腸を取るだけでなく内臓神経やリンパ管をこっそり切除すると、消化吸収機能が落ちて食事摂取してもそのまま下痢として排泄されてしまいます。栄養低下から免疫不全となり、次々と合併症が起りました。竹下先生の教えに従い四苦八苦して栄養管理をしながら、

大切なのは、栄養治療しながら患者さんの便の検査により消化吸収能を評価することが重要と考えました。その頃は患者さんや看護師さんとうんこの先生なんて呼ばれてました」

指導医から「患者さんのために骨惜しみはするな」と教わった片山院長は、いまもその言葉をモットーにする。患者の生きる力を後押しするには、治療に骨惜しみをしない。栄養管理やリハビリカンファレンスに参画し、スタッフとの意思疎通を欠かさない。

小学生のころ、兄が虫垂炎になり「その手術現場を見たい」と執刀医に申し出て、間近で見ることが外科医を志すきっかけになった。兄であり、グループを束ねる法人の片山外一理事長も同じく外科医である。

高校時代から剣道に親しみ、大学では同好会しかなかったため自ら剣道部を創部。初代主将として活躍した。以来、50年以上を経たいまも「年に数回は母校で現役部員と竹刀を交える」のが楽しみだという。段位は三段。自らを律し、患者のために骨身を惜しまない。そこには、いまなお現役医師として輝きを放つ片山院長の覚悟が垣間見えた。

PROFILE

片山寛次 かたやま・かんじ

1953年生まれ。関西医科大学卒。金沢大学旧第二外科に入局。外科診療や大学院での研究を経て福井大学第一外科へ。消化器外科医、がん専門医として膵臓やがんの腹膜転移の研究と臨床に従事。福井大学がん診療推進センター教授としてがん診療全般、緩和ケアに従事。また栄養部長としてNSTチェアマン、栄養教育にも従事してきた。趣味は剣道とスキー。